

英語の制限関係節の再構築に関して

松永, 享子
九州大学人文科学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/20050>

出版情報 : 九大英文学. 52, pp.203-224, 2010-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



英語の制限関係節の再構築に関して*

松永 享子

1. はじめに

関係節¹の大きな特徴の一つは、関係節内に空所があるということである。

- (1) a. the book [which John likes_]
- b. the book [that John likes_]

関係節の先行詞と関係節内の空所をどのように関連付けるのかということ、また関係節がどのように派生しているのかについてこれまで多くの先行研究で議論されてきている。これまでの先行研究を本稿では4つに分類する。

- (2) a. Matching 分析
- b. Promotion/Raising 分析
- c. Neo-Matching 分析
- d. Hybrid 分析

(2)に示した分析のどれも利点があるが、問題点もある。本論文では、これら先行研究に代わる Neo-Hybrid 分析を提案することで、先行研究の問題点を解決することを試みる。

2. 先行研究とその問題

2.1. Matching 分析とその問題点

Chomsky (1977)では、関係節の派生を wh 疑問文の派生と同様に捉えることを試みている。関係節内の派生を wh 疑問文の派生と同様に考え、その後先行詞との関係を形成する派生を Matching 分析と呼ぶ。

- (3) a. [DP the [NP book]][CP which_i [IP John likes t_i]]
 ↑
 └──────────────────┘
- b. [DP the [NP book]][CP Op_i that [IP John likes t_i]]
 ↑
 └──────────────────┘

Matching 分析において、wh 関係節では wh 句が演算子として働き、that 関係節では空の演算子(Op)が生じる。(3a)(3b)の構造で、演算子は痕跡を束縛し、痕跡は変項と解される。その後、先行詞と演算子が同一解釈を得るための関連づけがなされる。Matching 分析の特徴は、関係節内に先行詞の要素が存在せず、関係節の外側に基底生成するという点である。しかし、この特徴が Matching 分析の問題を引き起こすことになる。Matching 分析による派生では、関係節内に先行詞の要素がないため、先行詞が関係節内で解釈される(4)(5)の例を説明することができない。

- (4) a. We made headway.
 b. The headway that we made was satisfactory. (Bhatt (2002:47))
 c. [DP The[NP headway]][CP Op that [IP we made t_i was satisfactory]]
 ↑
 └──────────────────┘
- (5) a. She's keeping careful track of her expenses.
 b. The careful track that she's keeping of her expenses pleases me. (Bhatt (2002:47))
 c. [DP The[NP careful track]][CP Op that she's keeping t_i...]]
 ↑
 └──────────────────┘

(4b)(5b)の関係節の先行詞は、(4a)(5a)と同様に関係節内でイディオムとして解釈されることが可能である。このように、先行詞が関係節内で解釈されることを再構築効果と呼ぶ。Matching 分析では、(4c)(5c)のような派生になるため、関係節内に先行詞の要素が存在せず、再構築効果が生じないことを予測するが、実際には(4b)(5b)では再構築効果が生じ、関係節内で‘make headway’ ‘keep careful track’のイディオム解釈が可能になる。このように Matching 分析では、再構築効果の事実を捉えることができないという問題がある。

2.1 Promotion 分析とその問題点

Promotion 分析は Raising 分析とも呼ばれ、Kayne (1994)などによって提案されている分析である。Promotion 分析では、Matching 分析とは異なり先行詞が関係節内に基底生成し、その後先行詞の位置まで上がっていくという派生を辿る。具体的な派生を(6)に示す。(6)の中抜き文字はコピー要素を表す。

- (6) a. the book which John likes
 b. $[_{DP} \text{the}_{[NP} \text{book}]_{[CP} [\text{which book}]_{[IP} \text{John likes } [\text{which book}]]}]$
 c. the book that John likes
 d. $[_{DP} \text{the}_{[NP} \text{book}]_{[CP} [\text{Op book}] \text{ that } [_{IP} \text{John likes } [\text{Op book}]]}]$
- (Kayne(1994))

Promotion 分析では、wh 関係節では(6b)のように、[wh NP]の形である[which book]が関係節内に基底生成し、that 関係節では(6d)のように、[Op NP]の形である[Op book]が関係節内に基底生成している。この[which book] [Op book]が関係節内の[Spec, CP]に移動した後、NP ‘book’のみが関係節の外にある先行詞の位置に移動する。Promotion 分析では、先行詞が関係節内に基底生成し先行詞の位置まで移動するので、先行詞と関係節内の空所の関係を容易に説明することができる。さらに、Promotion 分析では、Matching 分析では説明することができなかった再構築効果が生じるという事実を説明することが可能と

なる。先に観察した(4b)の Promotion 分析による派生を以下の(7)に示す。

- (7) a. The headway that we made was satisfactory. (=4b)
 b. $[\text{DP The}_{\text{NP headway}}][\text{CP} [\text{Op headway}] \text{that } [\text{IP we made } [\text{Op headway}] \text{was satisfactory}]]$.
-

(7b)に示しているように、Promotion 分析では、先行詞の要素が関係節内に基底生成しているため、再構築効果が生じ、関係節内でイディオム解釈をすることが可能となる。このように、Matching 分析では捉えることができなかった関係節内で再構築効果が生じるという事実を Promotion 分析では捉えることができるという点で、Promotion 分析の方が Matching 分析よりも優れていると考えられる。しかし、Promotion 分析では(8)に示す事実を捉えることができない。

- (8) a. ?? The headway which Mel made was impressive.
 b. The headway that Mel made was impressive.
 c. ?? The careful track which she's keeping of her expenses pleases me.
 d. The careful track that she's keeping of her expenses pleases me.

(Aoun and Li(2003:110))

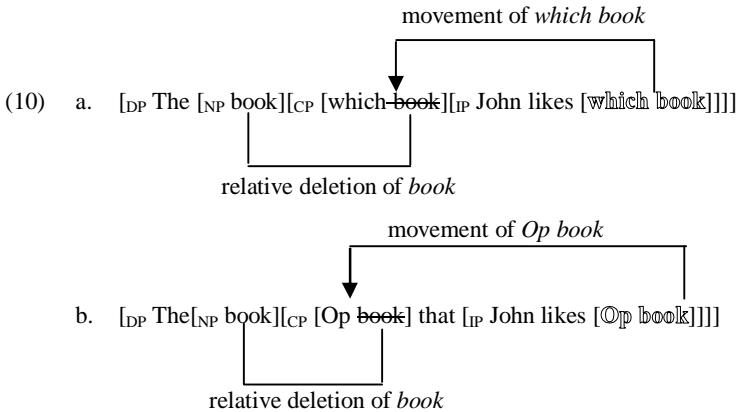
(8)に示しているように、wh 関係節と that 関係節で容認性に差が生じている。Promotion 分析では、(9)に示すように wh 関係節、that 関係節ともに同じ派生をたどる。

- (9) a. ?? The headway which Mel made was impressive.
 b. $[\text{DP The}_{\text{NP headway}}][\text{CP} [\text{which headway}]] [\text{IP Mel made } [\text{which headway}] \text{was impressive}]]$
 c. The headway that Mel made was impressive.
 d. $[\text{DP The}_{\text{NP headway}}][\text{CP} [\text{Op headway}] \text{that } [\text{IP Mel made } [\text{Op headway}] \text{was impressive}]]$
-
-

(9b)で先行詞の要素 ‘headway’は関係節内に基底生成するので、再構築効果が生じ関係節内でイディオム解釈が可能になることを予測する。しかし、この予測に反し(9a)では容認性が低下している。このことから、Promotion 分析では関係節の再構築効果に関する事実を捉えることができないのは明らかである。

2.3 Neo-Matching 分析とその問題点

Sauerland (2003)²は、Matching 分析と Promotion 分析を融合させたような派生を提案している。本論文では、この分析を Neo-Matching 分析と呼ぶ。Sauerland (2003)が提案した制限関係節の派生を(10)に示す。



Neo-Matching 分析では、先行詞と同じ要素が関係節内に[wh NP]あるいは[Op NP]の形で基底生成する。この[wh NP][Op NP]が関係節内の[Spec, CP]まで移動する。ここまでは Promotion 分析と同じだが、Neo-Matching 分析では、先行詞の位置に先行詞の要素が基底生成している。[wh NP][Op NP]が関係節内の[Spec,CP]まで移動した後、relative deletion という PF 操作により関係節内の NP が削除される。relative deletion の定義を(11)に示す。

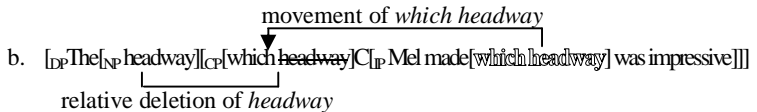
(11) Relative Deletion

In matching relatives, the internal head must not be pronounced. Furthermore, the external head must be the antecedent of the internal head.

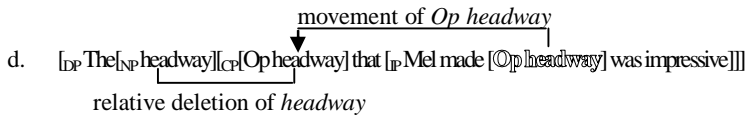
(Sauerland(2003:221))

Neo-Matching 分析では、この Relative Deletion という操作によって先行詞と関係節内の空所との関係を保証している。Neo-Matching 分析では、関係節内に先行詞と同じ要素が存在するので、Matching 分析の問題点を解決することはできるが、wh 関係節と that 関係節が同一の派生になるので、Promotion 分析と同様に wh 関係節と that 関係節で容認性に差が生じるといふ事実を説明することが出来ないという問題がある。

(12) a. ?? The headway which Mel made was impressive. (=8a))



c. The headway that Mel made was impressive. (=8b))



(12b)に示しているように、Neo-Matching 分析では wh 関係節の関係節内にも先行詞要素の headway が存在するので、再構築が生じ関係節内でイディオム解釈が可能となり、(12a)が容認可能となることを予測するが、この予測に反して(12a)は容認性が低下している。このことから、Neo-Matching 分析でも関係節の再構築に関する問題を解決できないということが分かる。

2.4 Hybrid 分析とその問題点

Aoun and Li (2003)は、wh 関係節と that 関係節とで容認性が異なるという事実を捉えるために、Hybrid 分析を提案している。Hybrid 分析では、再構築効果に関する wh 関係節と that 関係節の振る舞いの違いに焦点が当てられている。

- (13) a. *[?] The picture of himself which John painted in art class is impressive.
 b. *[?] The picture of himself which John likes best is impressive.
 c. The picture of himself (that) John painted in art class is impressive.
 (John=himself)
 d. The picture of himself (that) John likes best is impressive.
 (John=himself)
 (Aoun and Li (2003:111))

(13a,b)の wh 関係節では、関係節の先行詞 ‘picture of himself’ が関係節内で解釈される再構築効果が生じず、「束縛理論の Condition A」³(以降 Condition A) 違反となり、容認性が低下している。一方、that 関係節の(13c,d)では、再構築効果が生じるため先行詞 ‘picture of himself’ が関係節内で解釈され、Condition A を満たし容認可能な文となる。

束縛理論に関する再構築効果の問題の他に関係節内でイディオム要素が解釈できるか否かについても wh 関係節と that 関係節で振る舞いが異なる。

- (14) a. ^{??} The headway which Mel made was impressive. (=8a)
 b. The headway that Mel made was impressive. (=8b)

wh 関係節の(14a)では再構築効果が生じず、関係節内で ‘make headway’ のイディオム解釈ができないため、容認性が低下しているが、that 関係節の(14b)では再構築効果が生じるため関係節内で ‘make headway’ のイディオム解釈が可能となり容認可能な文となる。

このような wh 関係節と that 関係節の振る舞いの違いを説明するために、Aoun and Li (2003)では Hybrid 分析を提案している。Hybrid 分析とは、wh 関係節には Matching 分析を、that 関係節には Promotion 分析を用いるという分析である。Hybrid 分析の分類を(15)に示し、派生を(16)に示す。

- (15) wh 関係節 Matching 分析
 that 関係節 Promotion 分析

- (16) a. the boy who I like...
 b. [DP the_{[ForceP[NP boy]]}]_[ForceP F] [DP who]_[TopP Top] [IP I like _{wh}]]]
 c. the boy that I like...
 d. [DP the_{[ForceP[DP [NP boy]]]}]_[ForceP that] [DP]_[TopP DP] [NP boy]_[TopP Top] [IP I like [DP [NP boy]]]]]
-

(Aoun and Li (2003:122))

このように、wh 関係節と that 関係節とで派生を分けることによって wh 関係節と that 関係節の再構築効果に関する振る舞いの違いを捉えることができるようになる。

- (17) a. *² The picture of himself which John likes best is impressive. (=13b)
 b. [DP The_{[ForceP[NP picture of himself]]}]_[ForceP F] [DP]_[TopP DP] [NP picture of himself]_[TopP Top] [IP John likes [DP]_[wh]]_[wh] best]]]
-

- (18) a. The picture of himself that John likes best is impressive. (=13d)
 b. [DP The_{[ForceP[DP [NP picture of himself]]]}]_[ForceP that] [DP]_[TopP DP] [NP picture of himself]_[TopP Top] [IP John likes [DP [NP picture of himself]]] best]]]
-

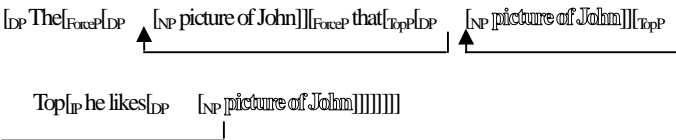
wh 関係節の(17b)で、先行詞の要素 ‘picture of himself’ は関係節内には存在しない。そのため再構築効果が生じず、Condition A 違反を引き起こし(17a)は容

認性が低下している。一方 that 関係節の(18b)では、先行詞の要素 ‘picture of himself’ が関係節内に基底生成しているため、再構築効果が生じ Condition A を満たし(18a)が容認可能となる。このように Hybrid 分析では、Matching 分析、Promotion 分析、Neo-Matching 分析では説明することができなかった再構築効果に関する wh 関係節と that 関係節の振る舞いの違いを説明することができる。

しかし、Hybrid 分析では捉えることができない事実が存在する。

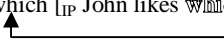
- (19) a. The portrait of John that he likes is on the display. (John=he)
(Citko (2001:12))
- b. The relative of John that he likes lives far away. (John=he)
(Sauerland (2003:208))

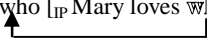
Hybrid 分析では、that 関係節は Promotion 分析で派生するため、関係節内に先行詞の要素が存在し、再構築効果が生じることを予測するが、この予測に反して(19)では再構築効果が生じず、Condition C を満たすため容認可能な文となる。Hybrid 分析での(19a)の具体的な派生を(20b)に示す、

- (20) a. The picture of John that he likes is on the display. (= (19a))
- b. $[_{DP} \text{The}]_{[FOCUS]} [_{DP} \text{ picture of John}]_{[FOCUS]} \text{that} [_{TOP}] [_{DP} \text{ he likes}]_{[FOCUS]} [_{NP} \text{ picture of John}]_{[TOP]}$


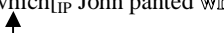
このように、that 関係節において Condition C に関わる要素が先行詞となる場合は、再構築効果が生じないという事実を Hybrid 分析では説明することができないという問題が生じる。(21)に示すように that 関係節では、Condition A と Condition C は対照的な振る舞いを見せる。

が[-human]であるとき、関係代名詞は ‘which’ になり、[wh pro]が[+human]であるとき、関係代名詞は ‘who’ になると本稿では想定する。wh 関係節の具体的な派生を(23)(24)に示す。

- (23) a. the book which John likes (=2a)
 b. [DP the_[NP book][CP which_{[IP John likes wh_[which]]]]}
- 

- (24) a. The boy who Mary loves....
 b. [DP The_[NP boy][CP who_{[IP Mary loves wh_[who]]]]}
- 

(23b)と(24b)で、関係節内にはそれぞれ ‘which’ と ‘who’ の素である[wh pro]が基底生成する⁵。この[wh pro]が関係節内の[Spec, CP]まで移動する。Matching 分析では、関係節内に先行詞の要素が存在しないため、再構築効果が生じない。このことから、wh 関係節では再構築効果が生じないという事実を正しく捉えることができる。(25)では、再構築効果が生じず、Condition A 違反が起こるため容認性が低下している。

- (25) a. ^{??}The portrait of himself which John painted is extremely flattering.
 (Aoun and Li(2003:111))
 b. [DP The_{[NP [NP portrait of himself]}[CP which_{[IP John painted wh_[which]]]]]...}
- 

3.2 that 関係節

本稿では、that 関係節は Matching 分析、Promotion 分析のどちらの分析でも派生することが可能であると主張する。Matching で派生する that 関係節の関係節内には、[Op pro]が基底生成すると考える。[Op pro]は[+human][-human]に関わらず、常に Op になる。wh 関係節と同様に Op は代名詞の機能を内包しているため、関係節の先行詞と関係節内の空所の関係は代名詞によって保証される。Matching で派生する that 関係節の派生を以下に示す。

- (26) a. the book that John likes... (=2b)
 b. $[_{DP} \text{the}[_{NP}[_{NP} \text{book}]_{CP} \text{Op that } [_{IP} \text{John likes } \text{Op}]]]$
-

また、null operator である Op は音的に先行詞により認可されねばならず、そのため null operator に関する独自の想定を本稿では提案する⁶。

- (27) null operator は先行詞に PF merge しなければならない。

この(27)を想定することで、null operator が音的に先行詞と関連付けられることが保証される。制限関係節とは異なり、非制限関係節では主文と関係節が音的に区切られるため、この PF merge が不可能となる、そのため、(28)に示すように非制限関係節では null operator が使用できないことが説明できる。

- (28) a. The man (that) I saw yesterday is great. (de Vries (2006:261))
 b. * John, (that) I saw yesterday, is great. (ibid.)

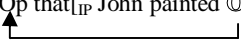
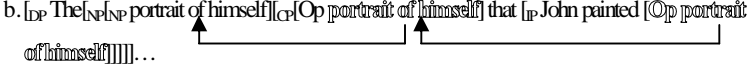
次に Promotion で派生する that 関係節の具体的な派生を(29)に示す。

- (29) a. the book that John likes (=2b)
 b. $[_{DP} \text{the}[_{NP}[_{NP} \text{book}]_{CP} [_{Op} \text{book}] \text{ that } [_{IP} \text{John likes } [_{Op} \text{book}]]]]]$
-

先に見た Promotion 分析と同様に、本稿での Promotion 分析でも null operator を想定する。そのため、関係節内には[Op NP]が基底生成する。これは Matching で派生する that 関係節の関係節内に基底生成する[Op pro]と平行である。


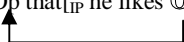
ここで、that 関係節における再構築について考察する。まず、再構築が生じている(30)の that 関係節の Matching での派生と Promotion での派生を(31)に示す。

- (30) The portrait of himself that John painted is extremely flattering.
 (John=himself) (Aoun and Li (2003))

- (31) a. $[_{DP} \text{The}[_{NP}[_{NP} \text{portrait of himself}]_{CP} \text{Op that}[_{IP} \text{John painted } \textcircled{Op}]]]] \dots$

 b. $[_{DP} \text{The}[_{NP}[_{NP} \text{portrait of himself}]_{CP}[_{Op} \text{portrait of himself}] \text{ that } [_{IP} \text{John painted } [_{Op} \text{portrait of himself}]]]]] \dots$


(30)は、(31a,b)の二つの派生が可能である。operator が関係節内に基底する(31a)では、関係節内に先行詞の要素 ‘portrait of himself’ が存在しない。その結果、再構築が生じず Condition A を満たすことができず、容認不可能となる。一方、(31b)では先行詞の要素 ‘portrait of himself’ が関係節内に存在する。そのため、再構築が生じ容認可能となる。(31b)の派生で容認可能な文を生成することができるため、(30)が容認可能な文になるという事実を捉えることができる。次に再構築が生じない(32)の文を考察する。

- (32) The relative of John that he likes lives far away. (John=he)
 (Sauerland (2003:208))

- (33) a. $[_{DP} \text{The}[_{NP}[_{NP} \text{relative of John}]_{CP}[_{Op} \text{relative of John}] \text{ that } [_{IP} \text{he likes } [_{Op} \text{relative of John}]]]]]$

 b. $[_{DP} \text{The} [_{NP}[_{NP} \text{relative of John}]_{CP} \text{Op that}[_{IP} \text{he likes } \textcircled{Op}]]]]]$


(32)は(33a,b)の二つの派生が可能である。(33a)では、先行詞の要素 ‘relative of John’ が関係節内に基底生成し、その後先行詞の位置まで移動する。そのため、再構築が生じ Condition C 違反となり容認可能な文を生成することができない。一方、関係節内に operator が基底生成する(33b)では、先行詞の要素 ‘relative of John’ が存在しない。そのため、再構築が生じず Condition C を満たし容認可能な文を生成することができる。

このように、that 関係節で Matching, Promotion 両方の派生が可能であると

想定することで、that 関係節における Condition A と Condition C に関する再構築効果の振る舞いの違いを捉えることができる。

- (34) *The headway on Mary's project that she had made pleased the boss.
(Citko(2001:6))

(34)は、以下に示す(35a,b)の派生が可能である。それぞれの派生を具体的に見ていく。

- (35) a. [DP The_{[NP[NP headway on Mary's project]]}]<sub>[CP Op that_[IP she had made Op]]]]...
 b. [DP The_{[NP[NP headway on Mary's project]]}]_{[CP Op headway on Mary's project] that_[IP she had made Op headway on Mary's project]]]]}</sub>

(35a)では、operator が関係節内に基底生成するため、再構築効果が生じずイディオム‘make headway’の解釈に失敗し、派生が破綻する。一方、(35b)の派生では関係節内に先行詞の要素 ‘headway on Mary's project’が基底生成するため、再構築効果は生じるが、再構築効果が生じると Condition C 違反が起きるため(35b)の派生は破綻する。このように、that 関係節 Matching, Promotion どちらで派生した場合でも破綻する(34)のような文は容認不可能となり、事実を正しく捉えることができる。

また、疑問文においても再構築効果を示すものと示さないものがある。


- (36) a. *Which claim [that John_i was asleep] was he_i willing to discuss?
(Heycock (1995:557))
 b. Which claim [that John_i made] was he_i willing to discuss? (ibid.:557)

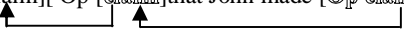
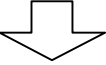
(36a)では、R 表現‘John’が補文節内にあるが、(36b)では関係節内にある。次に示す wh 疑問文の通常の派生では、(36b)が容認可能になるという事実を捉

えることが出来ない。

- (37) a. Which claim [that John_i made] was he_i willing to discuss? (=36b)
 b. [_{CP}[Which claim that John made]_C [_{IP} was he willing to discuss [which claim that John made]]]

Lebeaux (1991)は、(36)のような事実を捉えるために late merge 分析を提案している。これは、関係節などの付加詞は wh 要素が移動した後に merge するという分析である。本論文では late merge 分析を Neo-Hybrid 分析に組み込む。ここで、(36b)の派生を考察する。Neo-Hybrid 分析では、that 関係節の派生が 2 種類存在する。

- (38) a. Which claim that John_i made was he_i willing to discuss?
 b. S₁: Which claim was he willing to discuss
 S₂: [Op that John made]
 S₂ adjoins to S₁
 c. Which claim [Op that John made] was he willing to discuss

- (39) a. Which claim that John_i made was he_i willing to discuss?
 b. S₁: Which claim was he willing to discuss
 S₂: [[claim][Op [claim]that John made [Op claim]]]

 S₂ adjoins to S₁
 c. Which claim [[claim][Op that John made]] was he willing to discuss?

Matching の派生である(38)は、問題なく容認可能な文を生成することができる。しかし、(39)の Promotion での派生では、主節には関係節内の NP とは別の NP ‘claim’ がすでに存在しているため、関係節の[Spec,CP]にある先行詞 NP ‘claim’ が主節で認可されることができない。そのため、Promotion の派生では

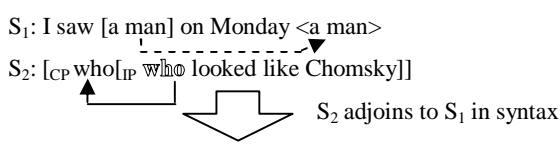
(36b)を正しく生成することができない。Promotion で派生する that 関係節は、先行詞NPが連続循環的に関係節内から主節へ移動するため late merge とは相容れない。これらのことから、Matching で派生する関係節に関して新たな想定を提案する。

(40) Matching で派生する関係節は、先行詞 NP と late merge することができる。

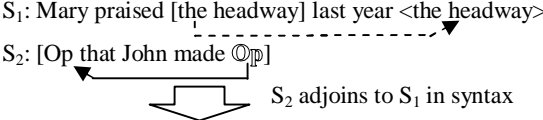
ここで、関係節の外置について考察する。関係節は外置を受けることができるが、(41)に示すように全ての関係節が外置されるわけではない。

- (41) a. A man came into the bar who we knew in school. (Borsley (1997:640))
 b.* Mary praised the headway last year that John made.
 (Hulsey and Sauerland (2006:115))

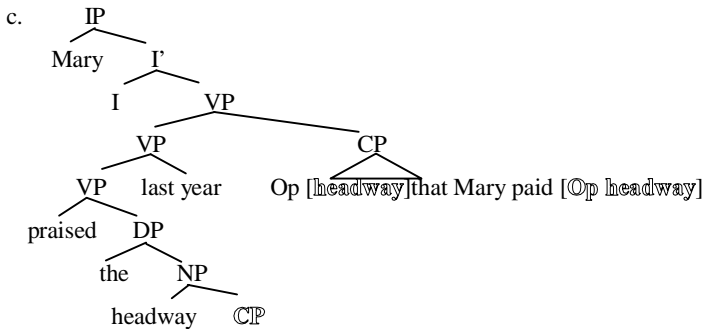
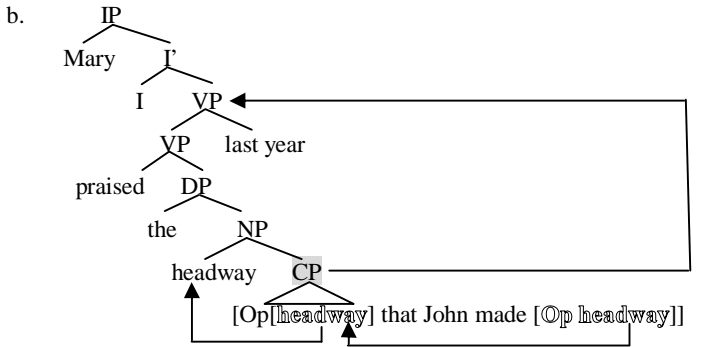
Fox and Nissembaum (1999)は、数量詞繰上げの後に付加詞を late merge する分析である post-QR merger 分析を提案している。この分析に則ると、関係節の外置は以下のように生成される。

- (42) a. I saw a man on Monday who looked like Chomsky.
 b. I saw [a man] on Monday
 c. S₁: I saw [a man] on Monday <a man>
 S₂: [CP who<sub>[IP wh_{NP} looked like Chomsky]]

 S₂ adjoins to S₁ in syntax
 d. I saw [a man] on Monday <a man> [who looked like Chomsky].</sub>

(42)に示しているように、wh 関係節の外置は正しく捉えることができる。次に、that 関係節の外置である(41b)について考察する。本論文で提案する Neo-Hybrid 分析では that 関係節の派生が Matching による派生と Promotion による派生の2種類ある。この2種類の派生をそれぞれ以下に示す。

- (43) a. *Mary praised the headway last year that John made.(=(41b))
 b. Mary praised the headway last year.
 c. S₁: Mary praised [the headway] last year <the headway>
 S₂: [Op that John made [Op]]
 S₂ adjoins to S₁ in syntax
 d. Mary praise the headway last year <the headway> [Op that John made]

- (44) a. *Mary praised the headway last year that John made.(=(41b))



Matching の派生である(43)では、PF 制限を満たしていないため容認不可能となる。一方、Promotion の派生である(44)では、右方移動を受けた関係節は PF 制限に違反する⁷。この結果、Matching による派生、Promotion による派生と

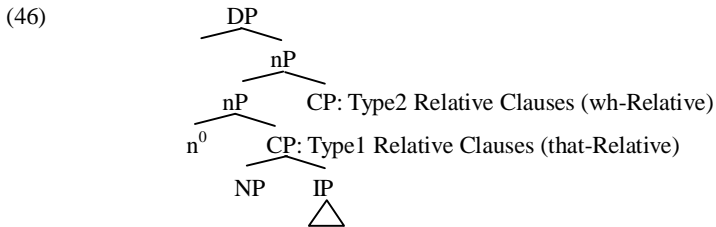
もに(41b)が容認不可能であることを正しく予測する。

また、Neo-Hybrid 分析では多重関係節の事実も捉えることができる。wh 関係節と that 関係節を多重関係節にする場合は、that 関係節が先行しなければならないという事実が存在する。

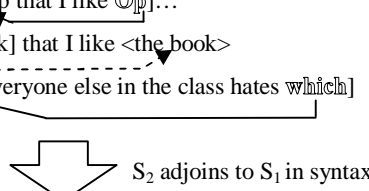
(45) a. The book that I like which everyone else in the class hates was written in 1843.
(Sag (1997:464))

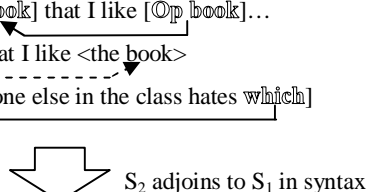
b. *The man whom John told us about that fixed the sink is here.
(Inada (2007:30))

Inada (2007)は、いくつかの言語の関係節を Type1 と Type2 に分類している。Inada (2007)では、英語の wh 関係節は Type2 の関係節であり、Matching で派生し、that 関係節は Type1 の関係節であり、Promotion で派生すると主張している。Inada (2007)は、英語の関係節を wh 関係節と that 関係節で分類しているため、Aoun and Li (2003)と同様に that 関係節で再構築が生じないという事実を説明することができないという問題があるが、(45)の事実に関して興味深い提案をしている。



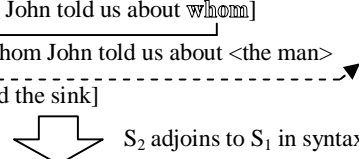
Inada (2007)では、Type1 と Type2 では生起位置が異なると主張し、(46)の構造を提案している。(45b)は(46)の構造に違反しているため容認不可能になると Inada (2007)は分析している。しかし、Neo-Hybrid 分析では Inada (2007)のような階層構造を想定することなく、(45)の事実を捉えることができる。まず、(45a)を考察する。Neo-Hybrid 分析では、that 関係節の派生が 2 種類存在する。それぞれの派生を以下に示す。

- (47) a. The book that I like which everyone else in the class hates was written in 1843.
 b. The book [Op that I like Op]...
 c. S₁: [The book] that I like <the book>
 S₂: [which everyone else in the class hates which]

 S₂ adjoins to S₁ in syntax
 d. [The book] that I like <the book> [which everyone else in the class hates]...

- (48) a. The book that I like which everyone else in the class hates was written in 1843.
 b. The book [[Op book] that I like [Op] book]...
 c. S₁: [The book] that I like <the book>
 S₂: [which everyone else in the class hates which]

 S₂ adjoins to S₁ in syntax
 d. [The book] that I like <the book> [which everyone in the class hates]...

(47)(48)に示しているように、that 関係節がどちらで派生した場合でも容認可能な文を生成することができる。

次に、(45b)を考察する。(45b)では that 関係節が late merge され、Matching での以下派生のみが利用可能である⁸。

- (49) a.* The man whom John told us about that fixed the sink here.
 b. The man [whom John told us about whom]
 c. S₁: [The man] whom John told us about <the man>
 S₂: [Op that fixed the sink]

 S₂ adjoins to S₁ in syntax
 d. The man whom John told us about <the man> that fixed the sink here.

(49)の派生は(27)の PF 制限に違反するため、容認不可能になり事実を正しく

- 3 本論文では束縛理論 Condition A~C の定義は、一般に以下のものを想定する。
- () Condition A: an anaphor must be bound within its local domain.
 Condition B: a non-anaphoric pronominal expression must be free within its local domain.
 Condition C: an R-expression must be free within the overall structure containing it.
- (Radford (2004))
- 4 先行詞と関係節の空所の関係は Predicate Modification によって可能となると本稿では想定するが、その具体的なメカニズムに関しては本稿では扱わない。
- 5 派生を示す箇所では、便宜上基底生成した[wh pro]を ‘who’あるいは ‘which’ と表記する。これと同様に[Op pro]は ‘Op’ と表記する。
- 6 tough 構文にも null operator が想定されることがある。tough 構文での operator の必要性を含め、tough 構文には議論の余地がある。(Hornstein, Nunes and Grohmann (2005)を参照)
- 7 右方移動した関係節内のコピー要素が、移動した要素から c-統御されないため、(44c)は適正束縛条件にも違反している。
- 8 (45b)の派生に関して、Promotion による派生は想定できず、late merge をしない Matching での派生でも容認可能な文を生成することはできない。

参考文献

- Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li. (2003) *Essays on the Representational and Derivational Nature of Grammar: The Diversity of Wh-Constructions*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Bhatt Rajesh (2002) “The Raising Analysis of Relative Clauses: Evidence from Adjectival Modification” *Natural Language Semantics* 10:43-90
- Bianchi Valentina (2000) “The Raising Analysis of Relative Clause: A Reply to Borsley,” *Linguistic Inquiry* 31,: 123-140
- Borsley, Robert D (1997) “Relative Clauses and the Theory of Phrase Structure,” *Linguistic Inquiry* 28:629-647
- Chomsky, Noam (1977) “On Wh Movement”, *Formal Syntax*, ed. by Cuicover, T, Wasow, A and Akmajian 71-132, Academic Press, New York
- Citko, Barbara(2001) “*Deletion Under Identity in Relative Clauses*,” *Proceedings of NELS 31*, 131-145

- Del Gobbo Francesca (2007) "On the syntax and semantics of appositive relative clauses."
Parentheticals, ed. by Dehé Nicole and Kavalova Yordanka 173-201, John Benjamins
Publishing Co, The Netherlands
- Henderson, Brent (2007) "Matching and raising unified," *Lingua 117*: 202-220
- Hornstein, Norbert, Jairo Nunes, and Kleanthes K. Grohmann (2005) *Understanding
Minimalism*, Cambridge University Press, New York
- Inada Shun'ichiro(2006) "Two Types of Relative Clauses in Germanic and Romance
Languages." *Linguistic Research 22*: 29-56, The University of Tokyo English
Linguistics Association, Japan
- Inada Shun'ichiro(2007) "Towards a Syntax of Two Types of Relative Clauses," *Linguistic
Research23* :1-41, The University of Tokyo English Linguistics Association, Japan
- Kayne, Rechar (1994) *The asymmetry of syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass
- Lebeaux, David (1991) *Relative Clauses, Licensing, and the Nature of the Derivation, Syntax
and Semantics 25*, Academic Press, New York.
- Lee, Felicia (2001) "Relative Clause without Wh-movement," *NELS 31*, 321-332
- Munn, Alan (1994) "A Minimalist account of reconstruction asymmetries," *Proceedings of
NELS 24*: 397-410
- Nagahara, Yukio (1990) *Kankeisetsu*(Relative Clauses), Taishukan, Tokyo
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax An Introduction*, Cambridge University Press,
Cambridge
- Sag, A. Ivan (1997) "English Relative Clause Constructions," *Journal of Linguistics 33* :
431-483
- Sauerland, Uli (2003) "Unpronounced Heads in Relative Clauses," *The Interfaces: Deriving
and Interpreting Omitted Structures*, ed. by K. Schwabe and S. Winkler:205-226, John
Benjamins, Amsterdam
- Vries, Mark. de. (2006) "The syntax of appositive relativization. On specifying coordination,
false free relatives, and promotion," *Linguistic Inquiry 37*(2): 229-270